



きらきら

新潟市立沼垂幼稚園
園だより
令和5年11月29日発行

どんぐりと魔法

園長 青木博子

美しく色を変えた園庭の木々の葉も舞い落ちて、今は子どもたちが歩く柔らかなじゅうたんになっています。様々な秋を子どもたちと感じていましたが、先週末から次の季節の訪れが告げられました。もう少ししたら、真っ白になった園庭で、子どもたちが歓声を上げながら駆け回ることになるでしょう。

この急激な寒暖差で体調を崩す子どもたちも増えています。保護者の皆さまはいかがでしょうか。体温調整が難しい時期になりましたが、引き続き、子どもたちの健康管理をよろしくお願いいたします。

さて、今日の主役は、子どもたちの秋の一番人気である「どんぐり」です。

一人の年少組の子どもが、登園時に、前日の降園後に拾ったどんぐりを持ってきました。いろいろな形のどんぐりです。どんぐりを、担任が用意してくれた銀のお盆に広げて見ていると、年少児、満3歳児の子どもが何人か集まってきて、一緒に見始めました。すると、偶然どんぐりが落ちて、転がったり、回ったりしました。「回ってる！」と声が上がりました。みんなでその様子を面白がって見ていると、一人の子どもがわざとどんぐりを落とし始めました。「また回ったね！」と、担任はどんぐりの動きを一緒に面白がりました。

さらに、担任が「いいこと思いついた！」とソフト積み木で坂を作り、どんぐりを転がして見せました。子どもは興味を示し、何度も転がしてみます。そして、転がっていく先をよく見えています。すると、どんぐりの帽子を持ってきて「これは？」と、転がるか試してみました。しかし、帽子は転がりませんでした。でも、勢いを付けて転がすと、少しだけ転がりました。そして、偶然、子どもの足の間をどんぐりが転がっていきました。

担任は言います。「Aさんの足の間を通った！」。するとAさんは、今度は自分から足を広げて、どんぐりの転がる方へ立ちました。Aさんが、足のトンネルを転がすことを楽しんでいると、ほかの子どもたちが次々と並び始めました。子どもたちは、どんぐりが自分の足の間を転がっていくのを今か今かと待っていました。



担任は、子どもがどんぐりの何に面白さを感じているのか、注意深く見つめ、理解しようとしていました。それが「どんぐりがころころ転がっていく。どこに転がっていくか分からない面白さ」だととらえたのです。ですから、けっして担任から「遠くまで転がりそうだね」「なんだか、ごちそうに見えるね」などとは言いません。それを伝えることが、子どもにあふれ始めた豊かな発想を止めてしまう、または、それを制限してしまうことを知っているからです。子どもがわざとどんぐりを落としたときも、「どうして落としたのだろう、この子は何に面白さを感じているのだろうか」と、一瞬の現象をチャンスと捉え、転がる現象がより楽しく感じられるようにと、坂を提案しました。さらに、自身の言葉をできるだけ削ります。なぜなら、教師自身がとらえた気付きや現象を捉える言葉を発し続けることが、子どもが広げつつあるイメージを遮ることも分かっているからです。

担任はほかにも、様々な大きさや形のどんぐりや帽子を分類して、そっと置いておきました。ほかの子どもが自然と見える場所に。

どんぐり、つまり「素材」をどう見るか、どう使うかは、子どもたちが決めます。そして担任は、「見応えのある作品・遊び」になることよりも、年少児・満3歳児の子どもがそこから何を感じ、何を学ぶのかを大切にしているのです。その年少児・満3歳児の学びを大切にする、担任の姿勢が、4歳児そして5歳児における、自覚的な個人・集団による課題解決につながっていくのです。

すごいですね。その学びを創り上げる先生方の力量の高さに、私は日々感動しています。本当に、それは魔法のようなのです。

